

琥珀い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ



特集

人と地域をつなぐコミュニティづくり

83

2015 March



人と地域をつなぐコミュニティづくり

3 視点 これから求められる「コミュニティづくり」とは studio・L代表 コミュニティデザイナー 山崎亮

6 山の木を地域通貨に換え、里山保全と経済活動を両立 芸北せとやま再生事業 (広島県北広島市)

8 食育をキーワードに公民館・学校・地域商社で連携 島根県益田市真砂地区 (島根県益田市)

10 夢を語る場をつくり多様な活動を創出 NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会 (鳥取市)

12 昔ながらの町並みを保存し価値や文化を後世に継承する 木綿街道振興会 (鳥根県出雲市)

14 「地域に生きる企業家群像」 清和鉄工株式会社 代表取締役 達俊彦 (鳥根県出雲市)

18 「キラリ、輝く元気企業」 独自開発のビジネスモデルで精密板金加工を極める倉敷レーザー (岡山県倉敷市)

20 「夢紡人/ゆめつむぎびと」 「日本一の清流錦川」の保全で地域に活気を生み、未来へつないでいく白井啓一さん (山口県岩国市)

23 「この名酒にこの一品」 純米吟醸 鷹勇 強力・松葉カニ (鳥取県琴浦町)

24 「古地図で読むまち」 尾道 (広島県尾道市)

26 「ローカル線探訪」 山口線 (山口市島根県津和野町・益田市)

28 「国宝の旅」 赤絲威鎧・大袖付 (伝源義経奉納) (愛媛県今治市)



碧い風

83
2015 March

contents

- 3 視点 これから求められる「コミュニティづくり」とは studio・L代表 コミュニティデザイナー 山崎亮
- 6 山の木を地域通貨に換え、里山保全と経済活動を両立 芸北せとやま再生事業 (広島県北広島市)
- 8 食育をキーワードに公民館・学校・地域商社で連携 島根県益田市真砂地区 (島根県益田市)
- 10 夢を語る場をつくり多様な活動を創出 NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会 (鳥取市)
- 12 昔ながらの町並みを保存し価値や文化を後世に継承する 木綿街道振興会 (鳥根県出雲市)
- 14 「地域に生きる企業家群像」 清和鉄工株式会社 代表取締役 達俊彦 (鳥根県出雲市)
- 18 「キラリ、輝く元気企業」 独自開発のビジネスモデルで精密板金加工を極める倉敷レーザー (岡山県倉敷市)
- 20 「夢紡人/ゆめつむぎびと」 「日本一の清流錦川」の保全で地域に活気を生み、未来へつないでいく白井啓一さん (山口県岩国市)
- 23 「この名酒にこの一品」 純米吟醸 鷹勇 強力・松葉カニ (鳥取県琴浦町)
- 24 「古地図で読むまち」 尾道 (広島県尾道市)
- 26 「ローカル線探訪」 山口線 (山口市島根県津和野町・益田市)
- 28 「国宝の旅」 赤絲威鎧・大袖付 (伝源義経奉納) (愛媛県今治市)

●表紙写真：北広島町の茅葺き風景 写真撮影：荒木 則行 (広島市在住)
 ●目次写真提供：NPO法人西中国山地自然史研究会、木綿街道振興会、古川 誠、竹重 満憲、山口県観光連盟
 ●表紙デザイン：久原 大樹 (広島市在住) *本誌は環境に配慮した用紙を使用しています。



人と地域をつなぐコミュニティづくり

これから求められる コミュニティづくりとは

studio・L代表 コミュニティデザイナー 山崎亮



なぜ今 コミュニティデザインか

近年、人がつながる仕組みをつくるコミュニティデザインが注目されるようになったのは、阪神・淡路大震災や東日本大震災の影響が大きいと思います。インターネットの登場後、相互補完的なウェブサービス、いわゆる「Web2.0」が広まり、誰でも情報発信できるようになりました。さらに、スマートフォンやソーシャルメディアの普及によって、コミュニケーションが容易になり、リアルな世界でのつながりよりも、バーチャルな世界でのつながりがどんどん肥大していききました。

人々がリアルな世界でのつながりから逃れようとしてきたのは、運命共同体としての地域が煩わしかったからではないでしょうか。以前は近所の人の噂話や町の寄り合いが煩わしくても、その地域で生きていくにはお互いに協力していくことが不可欠でした。しかし、現代の生活では、都市でなくても一人で暮らしているようになり、かつてのリアルなつながりの価値が薄れていきました。

こうした中で発生した大震災によって、やはり地域のつながりがなくては生きていけないとみんなが再認識したのだ

と思います。それでも、以前のような密度の濃い関係には戻りたくない。そこで、価値観を同じくする仲間が集まって、何かを一緒にやろうとする緩い結び付き、いわゆる「ウィーク・タイズ」をどう作っていくかが、今模索されています。

コミュニティデザイナーとは、その結び付きをどうつくっていくかということだと考えています。ポイントは、その活動が多少とも地域に貢献すること。仲間を集まって、楽しさを共有するだけでは、本人たちが飽きてしまいます。活動を続けて、地域の人から「ありがとう」と感謝されるようになると、もっと続けようと思うようになります。

それぞれが楽しみながら地域で活動する

もちろん、その先には会社を起したり、経済活動の規模を大きくしたりして、活性化が数字で表れてくるビジネスに展開することもあります。一方で、そこまですると腰が引けてしまう人もいます。趣味の延長として楽しいから活動していた、起業までは考えていなかったという人も地域の中には大勢いるわけです。

では、その人たちの活動が地域に貢献していないかというところではあります。また、これまでにないプロセスで総合振興計画を策定するため、職員の協力が不可欠でした。このとき、約百名の役員職員ほぼ全員がワークショップに参加してくれたため、プロジェクトの進め方に対し、さまざまな意見を得ることができました。

その後、総合振興計画づくりのワークショップを行ったときには、約五十名の住民が参加してくれました。そこでみんなが出した言葉や意見を最終的に、「ひと」「暮らし」「環境」「産業」の四つに分類し、それぞれのテーマで十三名のチームを編成しました。

チームには若い人、高齢の人、U・Iターン者、地元継続居住者など、そ



住民活動から生まれた、昔の保育園を活用した小道具カフェ



海士町総合振興計画策定にあたり、町役場内でワークショップを実施

せん。仮に、会社が数百万円を納税したとして、その税金を使って自治体の生活福祉事業でどれだけのことができないかという点、数人分の人件費にもならないかもしれない。むしろ、地域のボランティアの人たちが、楽しみながら福祉活動を手伝うことで、同じ成果が生まれることもあります。どちらが素晴らしいかは一概には言えません。

これまでさまざまな地域のコミュニティづくりに関わってきた中で非常に嬉しく思うのは、活動に参加した人たちから「私の人生にこんなことが起きるとは思っていなかった」と言われたときです。モノを大量消費するぜいたくな

それぞれ異なるタイプの人があります。ここから、チームビルディングを行い、リーダーを決めてチームごとの役割を明確にしていきました。その中で出てくるさまざまな主張をまとめて具体的なプロジェクトにするにはいくつかの技術が必要になります。集団でアイデアを出し合つて問題を解決する「ブレインストーミング」や得られた発想を整理する「KJ法」などの会議手法から、少人数のテーブルをテーマごとに設置し、順次回りながら気楽に話し合う「ワールドカフェ」など、活動が円滑に進むためのファシリテーション技術を用いながら、自分たちでワークショップを進められるようにしていきました。そのため、三回目のワークショップ以降は、チームが自分で会合を繰り返すようになりました。

こうしてできあがった住民提案を関係する各課に持っていく、さらに検討を重ね、住民提案や事業に基づく総合振興計画が策定されました。

この総合振興計画は議会の反応も良く、計画づくりに参加した住民たちはそれぞれの集落を回って、計画の内容を説明しました。それと同時に、各チームが実施しようとしているプロジェクトへの協力を呼びかけました。

そして各チームも活動を開始し、I

暮らしではない部分で、充実した人生を見いだせること。地域活動に関わっていくことで、豊かさとは何か、楽しさとは何かという価値観が変化する人も多くいます。

住民が参加した海士町総合振興計画づくり

われわれが地域振興に関わる時、主に四つの段階を踏みながら進めていきます。

第一段階はヒアリングです。地域の情報を聞き出し、さらにその相手と知り合いになることが目的です。

第二段階はワークショップです。これまで個別に話をしてきた人たちが一緒になつて話し合うことで、今までは違う話が生まれてきます。

第三段階はチームビルディングです。話をするだけではなく、行動を起こすにはチームが必要です。そのチームづくりのプロセスです。

第四段階はサポーターです。実際にそのチームが活動を始めたなら、要所でサポートしていきます。

二〇〇七（平成十九）年から、島根県海士町の総合振興計画策定に携わったとき、最初に山内道雄町長とお話したのは、総合振興計画を住民と一緒につくることで、まちづくりの担い手を

ターナー者、Uターナー者、地元継続居住者が集い、交流するためのプログラムを実施する「海士人宿プロジェクト」、島内で拡大している竹林の整備を目的に竹炭をつくる「鎮竹林プロジェクト」、イベントに高齢者らを誘い出す「お誘い屋さんプロジェクト」、島内の湧水の水質検査を進める「水を大切にプロジェクト」などが進められてきました。近年ではチームの垣根を超えた動きも見られています。

これからの地域づくりには賢いダウンサイジングが必要

人口減少、少子高齢化に直面している中で大切なのは、地域活動に参加する人の比率を高めることです。人口が二十人から千人に半減すれば、経済規模は小さくなります。しかし、地域づ

育てることが重要だということでした。具体的には、計画をつくるプロセスで参加した住民をチーム化し、それぞれのチームが総合振興計画の中で提案した事業を個別に実施する形です。

当時の海士町はすでに数々の事業を率先して行っており、人口二千四百人の島に二百五十人以上の移住者が住み着いていました。一見成功しているかのように見える海士町のまちづくりにいっくつか課題があり、その一つがUターナー者とIターナー者とこれまで住み続けてきた居住者との間で、あまりコミュニケーションが取れていないことでした。そこで、総合振興計画を策定するにあたって、それぞれ立場の異なる人同士でチームをつくり、プロジェクトを進めていくことを考えていきました。

まず、ヒアリングでは百人近くの住民に話を聞きました。海士町のプロジェクトになぜ若い人が参加してくれたかという点、このヒアリングが大きかったと思います。会議室で限られた人だけで議論する総合振興計画ではなく、住民が楽しく参加できる計画にしたいと丁寧な説明し、参加を呼びかけたいきました。直接会って話をすることで、チラシを配って広報することでは得られない効果が生まれます。

同時に役場内でワークショップを行うくりに関わる人が百人から二百人に増えて、何でも自治体に要望するのではなく、自分たちが主体的に地域活動をするようになれば、もつと暮らしやすくなりますし、行政運営費も減ります。海士町ですら、人口二千四百人のうち、地域活動に関わっているのは三百人ほどです。この人数を増やしていけば、地域はもつと変わっていきます。

江戸時代や明治時代には、町普請や家普請のように、社会基盤を地域住民でつくる維持する慣習がありました。極論ですが、二十世紀は、要望や陳情を言うだけの「お客さん」型の住民を増やしてしまつたのかもしれない。

人口が減っていく中で、責任感を持って地域活動に関わる人をどれだけ増やしていけるか。これからの地域づくりには賢いダウンサイジングが必要です。



第四次総合振興計画(左)とともに、まちづくり具体案を提案した別冊(右)も作成

profile

山崎 亮(やまざき・りょう)

1973年愛知県生まれ。大阪府立大学大学院修士後、SEN環境計画室勤務。2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。studio-L代表のほか、東北芸術工科大学教授、京都造形芸術大学教授なども務める。studio-Lではこれまでに海士町総合振興計画、笠岡諸島子ども振興計画、福山市中心市街地賑わい創出活動支援事業、瀬戸内しまのわ2014等、多様なプロジェクトに携わっている。

山の木を地域通貨に換え、里山保全と経済活動を両立

芸北せどやま再生事業 《広島県北広島町》

中国山地の山間にある北広島町芸北地域。山の木を地域通貨で買い取る芸北せどやま再生事業を推進し、里山の再生と経済活性化に取り組んでいる。



野外教室で子どもたちも伐採を体験 写真提供:NPO法人西中国山地自然史研究会

里山を整備しながら経済活動につなげる

島根県に接する北広島町は二〇〇五(平成十七)年に、大朝、芸北、千代田、豊平の四町の対等合併で誕生した人口二万人ほどの町である。千メートル級の中国山地の山が連なる、太田川・江の川水系の源流地域で、西日本有数の八幡湿原など貴重な自然を有す地域としても知られている。

特に芸北地域は、山林が土地の九割超を占め、林業と農業を主産業として山林とともに暮らしてきた地域だ。中国山地から切り出された木は、建築資材やパルプ材として使われてきたが、安い外国産材に押され、林業は徐々に廃れていった。加えて、拡大造林政策で増えた針葉樹が放置され、芸北地域の山林は荒廃するばかりだった。

環境を良くしなければ、ここには住めなくなる。地域と連携しながら環境で使うことができる。

発足時から二〇一四(平成二十六)年十二月までに、買い取った広葉樹は約七百三十トン、針葉樹は約九十トンの、せどやま券は約四百六十六万円分が発行された。現在、林家の登録数は五十七人になった。

そのほか再生会議では、木の消費を拡大するだけでなく、せどやま散策や、しいたけ販売、ピザ窯の使用など、暮らしの中で個人が楽しみながら「せどやま」に関わる方法もいろいろと提案している。

未来を担う子どもたちにせどやまの価値を伝える

さらに、研究会が熱心に取り組んでいるのが子どもたちへの教育である。芸北小学校の児童を対象に、せどやまの大切さを専門家が分かりやすく説明する教室を開くとともに、野外編として、実際に山の木を切り、市場まで搬出し、せどやま券に換える体験などを行っている。

「地道なことですが、こうした教育によって子どもたちにもせどやまへの興味を持ってもらうのが狙いです。今では、子どもたちが家族に『うちにもせどやまがあるの?』『うちの木をせどやま市場に持っていきばいくなるかな?』と聞



せどやま市場で薪に加工



芸北オークガーデンに設置した薪ストーブ

保全の活動を進めてきたNPO法人西中国山地自然史研究会(以下、研究会)のメンバーはそう考え、里山を整備しながら、経済活動につながる仕組みを模索していた。

「里山は、野生動植物と人間との緩衝地帯。整備された里山がなければ、イノシシや熊がエサを求めて人間が住むエリアに出没します。共生するためには、里山の適切な管理を行い、地域の生物多様性を保全し、里山の多面的機能を取り戻すことが必要なのです」と研究会理事長の近藤紘史(こうし)さんは語る。

二〇一二(平成二十四)年に住民グループ「芸北せどやま再生会議」を立ち上げた。「せどやま」とは裏山を意味する。県産材活用を促進する高知や鳥取を視察することで気付かされたのは、芸北地域ではスキヤヒノキなどが少なく、樹齢も若いため建築材にするのは難しいということだった。しかし、広葉樹は多いため、何とか生かしたいと

くようになったそうです」と研究会事務局の河野弥生さんは楽しそうに語る。こうした子どもたちの体験こそが、やがて、せどやまや地域を大切にしてくれる原動力になると信じている。

北広島町芸北支所では、再生会議と連携しながら、薪を使った豊かな暮らしを推進する「薪活!」を進めている。その成果の一つが、二〇一四年に町の宿泊・温浴施設「芸北オークガーデン」に薪ストーブ二台を設置したことだ。今後は、薪ボイラーの導入も予定しており、大口の供給先ができたことで、事業の安定化が期待されている。

全国に先駆け、生物多様性の保全に関する条例を制定したことで注目される北広島町。芸北せどやま再生事業の推進によって、自然環境や地域づくりがどのように変わっていくのかが楽しみだ。

(文・藤沢享乃)



持ち込まれた木は1トンを6,000円分の地域通貨で買い取る 写真提供:NPO法人西中国山地自然史研究会

考えていたとき、ある施設で、所有者が切り出した木を薪として利用する取り組みを知る。「これだ」と思った近藤さんたちは、戻つてすぐに「芸北せどやま再生事業」を立ち上げた。

せどやまを 宝の山に変える

立ち上げにあたり、目標としたのが、せどやまは、「宝の山」であることを住民に実感してもらつたことだった。山を所有する林家に事業に登録してもらい、持ち込まれた木は一トンを六千円分の地域通貨でせどやま市場が買い取る。

せどやま市場では、買い取った木を加工し、薪や炭、しいたけのほど木として販売する。薪の販売価格は一トン四万五千円前後。その他、加工用の商品開発も目指している。

「多くの人に参加してもらうために工夫したのが買い取り価格と数量です。パルプ用木材の買い取り価格の相場は一トン五千円。それよりも高い価格にすることで、得たと実感できます。また、商業ベースなら大量の木材を用意しなければ取引されませんが、せどやま市場では少量から受け付け、一トンに達していなくても、量に応じた価格で買い取ります」と、せどやま市場の場長の上田耕史さんは説明する。

これにより、普段林業に携わっていない人でも、休日に家族や友人たちと山へ行って木を切り、せどやま市場へ持ち込めるなど、気軽に参加できるようになっている。

買い取った木の代金は、地域通貨「せどやま券」で支払われる。せどやま券は一枚千円、事業に加盟している地元商店二十三軒で使用可能だ。商店主が二次使用することもでき、最大五回ま



左から、せどやま市場場長の上田さん、研究会理事長の近藤さん、事務局の河野さん

食育をキーワードに 公民館・学校・地域商社で連携

島根県益田市真砂地区（島根県益田市）

高齢化率が五十%を超える真砂地区では、公民館や学校、地域商社が協働し、食育事業を推進している。地区住民が普段の姿勢で参加できる活動にすることで、地域内のサイクルが構築されつつある。



地域の子どもたちに芋の植え付けを手ほどき 写真提供:真砂地区振興センター



手作りの真砂豆腐

地域の活性化のため 住民出資の地域商社を設立

島根県益田市の市街地から約十キロ南東に位置する真砂地区は、日晩山などの自然に囲まれ、のどかな風景を持つ地域である。地区人口は約四百人、高齢化率は五十%を超え、地区唯一となった真砂小学校の全校児童数は十六人ほどだ。

この地区では昔から社会教育への関心が高く、学校や公民館の活動に地域の人が積極的に参加する慣習があった。公民館を中心とした協議会で地区活性化が長年議論されてきた中で、対策として提案されたのは、地域振興を目的とした経済活動であった。二〇〇〇（平成十二）年三月、住民有志二十四人が出資し、資本金三百十萬円で有限会社真砂を設立。農産物加工事業を行う地域商社が誕生した。

真砂地区ならではの商品として何を給食に提供されるようになったのであろう。これは単なる食材提供だけでなく、普段一人で暮らしているお年寄りが子どもたちと接する機会にもなっている。収穫した野菜に余剰分が出るようになって、今では市街地のスーパーで産直販売が行われている。さらに、週に一回福祉施設の送迎バスを運行し、高齢者を乗せて、買い物支援も行う。収穫した野菜も積んでスーパーに向かうことで、地区住民の買い物支援しながら、野菜を売ることもでき、二重の効果もたらされる。野菜は完売する日も多い。購入者が真砂地区の野菜に惹きつけられるのは、安心安全で、その奥に地域と人とのつながりを感じられるからであろう。

地域で生まれた小さな活動がこの数年でうまく循環しはじめた現状について岩井さんは、「専門の農家に比べれば

作るか。考えついたのは豆腐だった。同年十一月に代表取締役になった岩井賢朗さんはその理由を次のように語る。

「真砂では昔から家で豆腐を作っていたので、地域独自の作り方がすでに存在していました。また、当時益田市で転作大豆が余っていたことも理由の一つです」

手作りで豆腐の生産を始め、最初は知り合いの家を訪ねたり、宅配をしたりしながら販売していった。徐々に認知され、販売数も増え、市内のスーパー全店舗に納入するようになる。豆腐の価格は税抜きで百七十円。豆腐を利用した厚揚げやこんにゃく、総菜なども作るようになったが、ある程度売り上げが上がったところで、壁に突き当たった。二〇一〇（平成二十二）年ごろのことだ。

「いくら良い豆腐だとしても、人口五万人の都市で商品を買う人の数は限られています。売り上げが伸びたところで、売り上げは微々たるものですが、自分たちの身の丈にあったレベルで活動することで、地域のエンジンが機能しはじめた」と考える。

「地域の仕組みを再編する

益田市では、二〇一三（平成二十五）年度から、地域住民が課題に対する解決策を自ら企画立案し、実践する地域自治組織の設立支援事業を推進している。真砂地区はそのモデル地区の一つだ。さらに、二〇一四（平成二十六）年度には総務省の「過疎地域自立活性化優良事例表彰総務大臣賞」を受賞。真砂地区への移住を希望する若い家族も多く、空き家登録など定住対策が喫緊の課題になっている。

「どの都市も人口が減っていく中で、今後は地域の仕組みを再編する、フォーメーション変えが必要になってくるのではないのでしょうか。真砂の場合は、一度シャッフルした上で、どうやって組織を組み合わせるかを考えてきました。各地域が納得して実践することが大切だと思います」

三者が形成する協働のトライアングルが今後どのような動きを見せていくのか。自立した地域自治組織としての期待はますます高まっています。

その先の展開が難しい。そのときに立ち戻ったのは、この会社の設立趣旨でした。普通の小さな食品製造会社ではなく、地域の活性化を目的とした会社であることを再認識し、それをどうアピールしていくかを考えたのです」

「この活動が報道されることで、真砂地区のカラーとして浸透し、商品を手にとるお客さんに『良い活動をしているね』と声を掛けてもらえるようになりました。地区住民にとっても、『考えたメニューが今度イベントに出るから、みんなで見よう』とか、商品が売れる様子を見て『こんなメニューはどうだろう』とアイデアを出すなど、わくわくする体験になっていったと思います」

学びから販売まで、活動の循環システムをつくる

そこで持ち上がったのが、公民館、学校、地域商社で協働する食育事業である。これまで三者とも食に関する活動を行っていたものの、連携する仕組みはできあがっていなかった。考えたのは、生涯学習講座や講師派遣など公民館で学びの場をつくり、学校のPTAでメニュー開発を行い、地域商社が売るとい

「この活動が報道されることで、真砂地区のカラーとして浸透し、商品を手にとるお客さんに『良い活動をしているね』と声を掛けてもらえるようになりました。地区住民にとっても、『考えたメニューが今度イベントに出るから、みんなで見よう』とか、商品が売れる様子を見て『こんなメニューはどうだろう』とアイデアを出すなど、わくわくする体験になっていったと思います」

住民が作った有機野菜で、市街地との交流を生む

三者が協働する別の仕組みとして生まれたのが、野菜作りを核とした活動だ。公民館で「安心安全な野菜作り土づくり研修会」を開催したところ、自分の畑で有機農業をする地区住民が増えてきた。その後、住民が作った無農薬野菜が週二回、市街地の保育園の



味覚をテーマにシェフが食育授業 写真提供:真砂地区振興センター

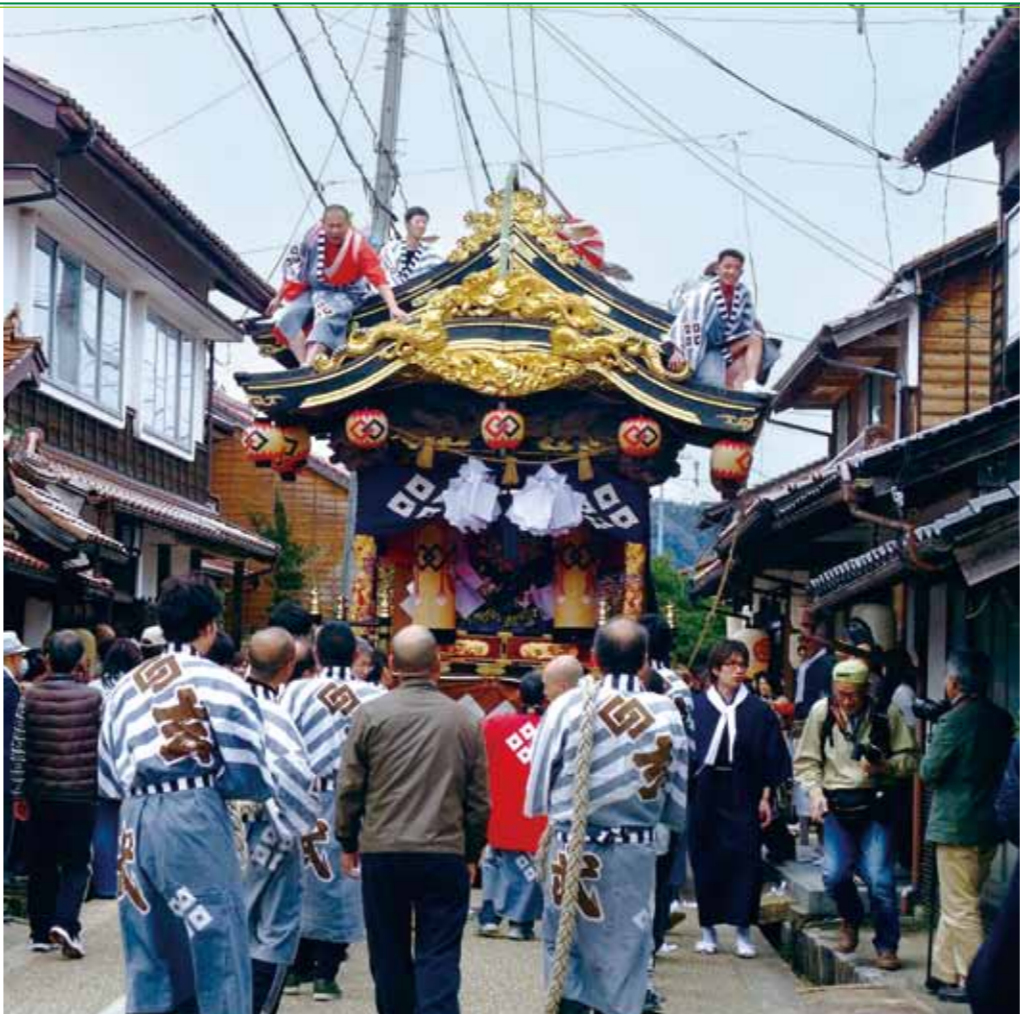


有限会社真砂代表取締役の岩井さん

夢を語る場をつくり 多様な活動を創出

NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会 《鳥取市》

町並み整備でまちづくりへの意識が高まっていた鹿野町。まちづくり協議会の発足後、異なる立場の人々が話し合える場をつくることで、多様な活動が生まれている。



鹿野町では「鹿野祭りの似合うまち」をテーマに景観を整備

コンテストでの受賞を きっかけに協議会を発足

鳥取市鹿野町は、かつて亀井茲矩が、津和野に移るまでの三十七年間、統治した城下町である。農業開発や朱印船貿易等の善政により繁栄し、現在でも交差点や水路、京風の千本格子に当時の城下町の面影を見ることができている。

この町にNPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会が設立されたのは二〇〇一（平成十三）年のこと。前年に催された鳥取県街なみ整備コンテストで、後に協議会の母体となる会社員グループが提案した「いんしゅう鹿野童里夢計画」が最優秀賞を受賞したのがきっかけとなった。町では、以前から町並み保存・再生の取り組みが進められており、住民のまちづくりへの意識は高まっていた。この計画も、日頃仲間が集まり、「鹿野がこんなまちだったら」と語り合っていた内容をまとめたものであったという。受賞を経て計画実現のための話し合いが重ねられた。「このとき県の方に言われたのは、もっといろいろな人を巻き込むべきだということ。鹿野では以前からさまざまなグループが活動を行っていたため、それらが母体となりました」と協議会理事長の佐々木千代子さんは振り返る。「やらないと何も始まらないことを教えられました」

人が訪れて楽しいまちへ 拠点づくりを進める

計画実現の第一歩になったのが、二〇〇二（平成十四）年に観光案内所兼休憩所としてオープンした「ゆめ本陣」である。しかし開業しても客が来ることはまれであった。当時の鹿野町には観光客が入れる飲食店もなく、ボランティアが一人で留守番する日々が続いた。そこで、ゆめ本陣の向かいにある空き家を活用し、二年後に食事処「夢こみち」を開店した。協議会が改修費用を捻出し、運営は地元的女性グループが行う。細かな経費は、どちらが負担するかその都度話して決めている。「進め方を型にはめてしまっていたら、どこかで破綻していたと思います。互いに助け合いながら、緩くつながることで



計画や夢を持ち寄る月1回の夢会

今日まで続けられたのではないのでしょうか」

また、城山公園近くにある、稚蚕共同飼育所だった建物の保存のため、二〇〇七（平成十九）年には株式会社サラベル鹿野を設立。百人の出資で約八百万円が集まった。「しかの心」と名付け、翌年にはカフェ、イベント会場、展示施設としてオープンした。

飲食店やお土産店など、外から人を呼ぶために必要な施設が何もなくだった状態から、空き家の活用、住民同士の協力によって、町の拠点づくりが少しずつ進められてきたのである。

グループ同士の協力で 新たな活動が生まれる

鹿野町の地域活動の特徴といえるの



「週末だけのまちのみせ」開催時の通り



理事長の佐々木さん

まちづくりコーディネーターを招聘しようかと考えていたのですが、その時のゲストに「誰かを待っていたってダメなんだ」と言われ、下手でもなんでも自分たちが動き出

が、城山公園の保全活動やグリーンツーリズム、二十年以上続くミュージカルなど、地域で活動するグループが十一団体も存在していることだ。協議会では、それらグループを含め、会員いかにかわらず、みんなで学べる場を定期的につくり出している。

その一つ、毎年開催する「いんしゅう鹿野まちづくり合宿」では、全国で先進的にまちづくりを進める人や専門家を呼び、外部の視点から鹿野を分析してもらい、今後のまちづくりに生かしている。その他にも研修会や視察、フォーラムも積極的に開催。協議会発足後、二〇〇三（平成十五）年に開いた鹿野まちづくり研修会での一言が、今でも忘れられないと佐々木さんは回想する。

「当時、鹿野町（行政）は、外部からまちづくりコーディネーターを招聘しようかと考えていたのですが、その時のゲストに「誰かを待っていたってダメなんだ」と言われ、下手でもなんでも自分たちが動き出

空き家の活用と移住者増加

現在力を注いでいるのが、空き家の

また、活動のアイデアを醸成するのに重要なのが、月一回の「夢会」の存在だ。誰でも参加することができる定例会で、その人の夢や計画を語り、みんなに協力を求める場となっている。「最初は理事会だったのですが、理事ばかりではつまらなかった。そこで、みんなが来られるようにし、夢を語る場にしたら、人脈が広がったり、アイデアが膨らんだりと前向きになれるようになったのです。毎回十〜二十名が集まり、夜遅くまで議論しています」

こうした団体の協力で、新たな動きも生まれている。鹿野町を拠点にする演劇集団「鳥の劇場」が毎年九月に行う「鳥の演劇祭」に合わせ、劇の合間にまちを楽しんでもらおうと、二〇一二（平成二十四）年からイベント「週末だけのまちのみせ」を開催している。

その時期だけにオープンする店舗出店者を公募したところ、県内外より昨年は四十店舗が集まった。この時期には二十〜四十代の若い世代が鹿野を訪れ、まちがより一層にぎわう。出店を機に、移住してくる人もいるという。



協議会メンバーを中心に空き家の片付け

活用による定住対策である。協議会では、市の移住定住空き家運営業務を委託されており、空き家情報の収集・発信、紹介を行っている。二〇一四（平成二十六）年十一月までに、十件が成立し二十三人が移住した。今は片付けて住める状態になった空き家の情報を公開すると、すぐに埋まってしまう状況だ。「協議会が仲介役になることで、貸す側にも安心感が湧くようです」と佐々木さん。鹿野にぜひ住みたいと思う人を中心に紹介しているという。「移住してきた若い人から『鹿野の大人たちは私たちと一緒に夢を見てくれる』と言われます。若い移住者が増えることで、地域の若い人も活動に参加するようになりました。住んで楽しいまちにするなら、自分たちがまず楽しまないと。それが活動のベースになっていると思います」

昔ながらの町並みを保存し 価値や文化を後世に継承する

木綿街道振興会 《島根県出雲市》

かつて木綿産業の興隆で港町、市場町、在郷町として栄えた「木綿街道」。貴重な町並みを保存しながら、にぎわいの場として活用することで、新たな魅力を発している。



夜までイベントが続く「おちらと木綿街道」



カフェことん



空きスペースでさまざまなイベントを開催

木綿産業で繁栄した町

宍道湖の西に位置する出雲市平田町（旧平田市）は、東西に船川が走り、水路に恵まれた地域で、商家の荷を運ぶ市場町として栄えてきた。江戸中期から後期にかけて、宍道湖の埋め立てによつてできた土地を肥やすために木綿が植えられ、木綿産業は松江藩の主力産業に発展した。特に「雲州木綿」は、大坂や京都で良質の木綿として高く評価されていたという。

産業の隆盛によつて、船川沿いには多くの商家が軒を連ね、この辺りは、港町、市場町、在郷町として繁栄する。

明治中期以降、生糸産業に転換し工業都市として発展してきたが、昭和後期には繊維産業の衰退、交通手段の移り変わりなどにより、まちのにぎわいは徐々に失われていった。また、都市開発により、中心地の平田本町の町並みは近代化していく。しかし隣接した



来間さんと事務局の平井さん

片原町・新町・宮の町・灘町・袋町地区等には、開発から逃れた昔ながらの町並みが残っていた。

そこで、「せつかく残った古い町並みを後世へつないでいきたい」と立ち上がったのが、後の木綿街道振興会の主力メンバーとなる来間屋生姜糖本舗店主の来間久さんら有志のメンバーだった。木綿産業で栄えたこの地域に「木綿街道」の愛称をつけ、二〇〇一（平成十三）年にまちなみイベント「おちらと木綿街道」を開催した。

六千人が訪れた おちらと木綿街道

「おちらと木綿街道」では、木綿街道内の空き家やスペースを使って、手仕事の工芸品や小物などを販売した。「町並みの魅力を発信するために、何かイベントを行い、近隣の人々に立ち寄りてもらおう」という目的であったため大々的にPRを行わなかったが、ふたを開けてみると、一日で約六千人が集まった。訪れた人から「こんな趣のある所が残っているなんて知らなかった」と褒められ、その反響の大きさに保存への思いが大きくなったという。

イベントを契機に「木綿街道の会」を設立。当初は木綿街道に魅了された地域外の会員が多かったため「もつと町

一を図ることが大切です

空き家の活用と雇用の創出

木綿街道の雰囲気味わいに訪れる人が増えていることから、滞在時間を延ばすために、飲食施設の開店が検討されていた。そして、二〇一四（平成二十六）年、空き家を借り受け改修し、「カフェことん」をオープン。立ち上げ時のスタッフ雇用には「ふるさと島根定住財団・Uターン島根地域づくり活動体験事業」を活用し、事業期間が終了した現在は、専任スタッフ二人を雇用し営業している。

当面の課題と考えているのは、街道内に点在する空き家の活用だ。「空き家の家主と交渉し、何らかの形



店ごとの味付けが楽しめるイベント「もち街」

で活用できるような働きかけや協力をする中で『カフェことん』のような新しい店舗ができて雇用が生まれ、木綿街道を訪れる人も増えます。また、活用することで建物が増え、町並みの景観も守ることが出来ます。地道に交渉を続け、一軒ずつでもよみがえらせることが今取り組むべきことだと思っております。『カフェことん』はそのモデルケースとなる店舗なので、経営を安定させ、長く続けていかなければなりません」と平井さんは話す。

活動開始から十五年近くが経過し、木綿街道の知名度が徐々に上がってくる中で、これからのように活動を展開していくべきか、転換期を迎えている。振興会メンバーと店主両方の立場から携わる来間さんは、「町並み保全を通して、この地域の魅力を高めるといふ活動目的からぶれないことが大事。そうしてお客さまが多く訪れてくれれば、私たち店主も代々続いた店を守っていくことができます。利益だけを追求し、単に木綿街道の名だけを冠した観光地にするつもりはありません」と語る。

街道ならではの魅力を失わずに、どう発展していけるのか。今後の方向性がますます重要になっている。

（文・藤沢享乃）

の中にいる人が頑張らないと、活動の継続が難しい」との思いから、二〇〇四（平成十六）年に地元住民中心の会「木綿街道商業振興会」を設立し、町並みを次世代に受け継ぐことと、木綿街道の地域資源を活用し地域振興に取り組みむことを活動目的に定めた。現在は、「木綿街道振興会」に改称し、本会員数は、地域外の人を含めた三十三名に及ぶ。

醸造業の商店が並ぶ町並み

木綿街道の特色はまず景観にある。特に、切妻屋根で、妻側に入り口があり、漆喰塗りの壁や海鼠壁が外壁の「切妻妻入り塗り家造り」は雲州平田特有の建築様式といわれる。間口が狭く奥行きが長いうなぎの寝床のような形になっているのも特徴だ。通りには、醤油や酒の醸造業、菓子屋など老舗の商家が並ぶ。

景観保全のため、二〇〇八（平成二

）年、町並みの活用として、年一回のおちらと木綿街道のほか、食のイベントとして「もち街」を開催。つきたての餅を買い、街道内のお店を回ってそれぞれの味付けを楽しめるイベントだ。その他、次世代人材育成として、学校の授業や全国規模のワークショップにも協力している。

活動を続けることで、さまざまなア

イデアや企画が出てくるが、限られた予算の中ですべてを行うのは難しい。振興会内で話し合いながら、活動目的と照らし合わせ、振興会で実施すべき活動かどうかを見定めている。また、業者と一般住民の温度差をなくすためにも、日頃のコミュニケーションが欠かせないと事務局の平井敦子さんは言う。「商店の利益のために活動していると思

われないためにも、周りの人と意思統



海外取引を通じ、機械の本質を知る

清和鉄工株式会社 代表取締役 達 俊彦 〈島根県出雲市〉

歯車製造企業として 大阪で創業

『出雲國風土記』に伝わる、古代出雲の神聖な山、大船山と仏教山に挟まれながら山陰道を東に進む。右に折れ、静かな道を進むと、角地に清和鉄工株式会社は建っていた。

入り口を抜けると、黒く光る古い機械が目に入った。歯車の製造企業として創業したこの会社が、最初に製造した歯切り機械（ホブ盤）だ。機械には、創業者・前川義二氏の名字がローマ字で刻まれている。このときから現在まで、歯車一筋で機械を製造してきた。「何千年も前からあった歯車は、機械で



歯車の高精度伝達、ギアノイズの低減を実現したギアホーニング盤
写真提供:清和鉄工株式会社

一番古い部品ですが、今でもニーズに応じてどんどん進化しています。だから、この仕事はやめられないんです」

企業家は、生き生きとした表情で語った。清和鉄工の達俊彦社長（55歳）だ。容姿からはまだ若さを感じるが、社長歴は二十年に達する。

地元での熱烈な歓迎を受け 出雲への立地を決める

清和鉄工は一九二〇（大正九）年、大阪市で創業する。当初、アメリカやドイツから中古の加工機を購入し、歯車を製造していたが、その後、加工機そのものの製造を主要事業とするようになる。一九二九（昭和四）年には、歯切り機械の開発に着手。一九三三（昭和八）年に歯切り機械の製造、一九五六（昭和三十一年）年にはホブ刃溝研削盤の製造を開始した。

昭和三十年代、全国で労働運動が激しさを増す中で、清和鉄工でもストライキが頻発する。これでは生産が続けられないと他の生産拠点を探していたところ、その話を聞きつけた島根県の企業誘致の担当者が、会社にやつてきた。縁もゆかりもない地だが、「とにかく一回来てほしい」と懇願され、訪れる決心をする。創業者が出雲に足を踏み入れたとき、待っていたのはまちを挙げて

の大歓迎であった。「こんな歓迎を受けたことがない」と感激し、ここ出雲に立地を決める。一九六九（昭和四十四）年、出雲工場が落成し、本社も出雲に移転した。

当時の清和鉄工は、さまざまな分野の工作機械を製造していたが、昭和五十年代のモーターゼーションの進展とともに、自動車分野に参入する。

「自動車以外の分野では加工数も少ないため、スピードよりも使い勝手の良さ、値段の安さが求められるのに対し、自動車分野では、なるべく効率よく加工できる大量生産向きの機械が求められます。質が異なる工作機械なので、それまで参入を見送っていたようですが、モーターゼーションの波がきて、そうも言っていられなくなったのではないだろうか」

達氏が三代目社長となった現在では、自動車分野が売り上げの八割を占める。自動車の厳しい競争の中で応用技術を磨いてきたからこそ、今があると考えている。

アメリカ進出をきっかけに 機械の普遍的なニーズを実感

兵庫県西宮市で生まれ育った達社長は、大学を卒業後、中堅の広告代理店に就職し、東京と大阪で勤務した。転職になったのは、夫人との出会いだ。夫

profile

達 俊彦 (たつとしひこ)

1959年兵庫県西宮市生まれ。1982年関西学院大学卒業後、広告代理店に入社。東京、大阪で勤務後、1989年に清和鉄工株式会社に入社。1994年より代表取締役。従業員75名、売上高16億円。

文: 城市 奈那 写真撮影: 古川 誠 (島根県出雲市在住)



コンポーネントの仕上がりが品質の高さを生む

人の父親が社長を務める清和鉄工のことを聞きながら、後継ぎがないことが気になっていた。

そのころ、海外で英語を学びたいという夢を持っていた達社長は、一年後に清和鉄工に入社することを前提として、広告代理店を辞めてアメリカに旅立つ。一九八九（平成元）年に帰国し入社すると、いきなりアメリカ進出の話が持ちかけられる。当時すでに台湾や韓国との取引があったが、本格的な海外進出はこれが初めてだった。

「シカゴを中心に三週間、ディーラーを回りました。日本人の同伴者はなし。時々日本語が話しなくなつて、夜ホテルで鏡に映る自分に向かって話しかけていました」と達社長は笑いながら回想する。しかし、この体験が次の段階に進む確実な一歩になった。

「収穫だったのは、アメリカでもどこでも、機械のニーズはあると分かったことです。営業に行つてうちの機械を説明すると、ここが良い、これが足りないと伝えてくれたり、こういう機械があれば検討すると言ってくれます。その国ごとにカスタマイズしていけば、売れるかもしれないと手応えを感じました」

アメリカを皮切りに、アジアやヨーロッパにも進出。ヨーロッパではドイツを拠点とし、イタリアのメーカーと組むことも



設計部門

本質的な良さです。基本性能の高さといえるかもしれません。もちろん機械にはマイナーチェンジが必要ですが、根っこにある機械の良さを見極めることが重要。これを押さえれば自然と売れていきますが、設計の人間からは意外と見えてこない部分なのです」

製品に全てを注ぎ込むのが、メーカーの生命線だと考える。そのためには、販路だけでなく、情報源の拡大が必要だ。フィードバックを繰り返すことで、ニーズに応える製品が誕生する。「だからメーカーは面白い」と達社長は言う。

今後の展開を見据え 製品ラインアップを再編

清和鉄工は、二〇一〇（平成二十二）年に創業九十周年を迎えたのを機に、製品ラインアップを四つのカテゴリーに再編した。

「アルティス」シリーズは、熱処理前の歯を造り出すCNCホブ盤で、これから激しくなるアジア勢との競争をにらんで、高品質高価格の製品とした。「オルビ



高剛性とレイアウト性を両立した清和鉄工の機械

あった。最終的には二十二カ国で実績を作った。

直接対話し、 相手との信頼関係を築く

「新しい国で販売するとき、まず初めに、現地で信頼のおけるパートナーを探します。工作機械の場合は、専門で取り扱うローカルな会社が必要です。特に、歯車関連は専門的な知識が必要になるため、四、五人ほどの小さな会社が扱っていることが多い。そこをどうやって見つけるかがポイントです」

現地パートナーを探してからは、徹底的にコミュニケーションを図る。通訳は介さず、お互いに言いたいことが言える関係を作っていく。

「お酒を飲んで、ご飯を食べて、いろいろと言ひ合える関係になれば、何とかあります」と達社長は語る。国ごとの文化の違いも身をもって体験してきた。

中国では、最初の取引先となる会社を訪れたとき、唐突に副社長から昼食に誘われる。副社長は「セイシンセイイ」と言いながら乾杯を続け、気がつくといブル約三十本を消費していた。

「この掛け声は、これから商売をするわけだから、誠心誠意の気持ちで付き合おうという意図だったようです。中国の人は日本人よりも疑い深く、その疑いの

ス」シリーズは、必要かつ十分な品質を保証した、リーズナブルなCNCホブ盤だ。現在は、中国や台湾で生産を進めている。一番力を注いでいるのが、研削、ホーニングなどの歯車の仕上げ用加工機の「ラクシス」シリーズである。このうちCNCギアホーニング盤は国内シェア七割を占め、アジア勢の追従を許さない高い性能を有す。最後の一つが、歯車を中心とした工具関連加工機の「フアプリス」だ。

地域に誇れる 企業になるには

二〇一〇年東京オリンピック・パラリンピックの年に迎える百周年に向けて、達社長は「脱自動車」、「脱歯車」、「脱工作機械」の三つの「脱」を掲げている。前提を取り払い、視野を広げることで、清和鉄工の機械の新しい可能性を探っている。

すでに始まったのが、「脱自動車」。医療機器や事務機器などで小さな歯車のニーズが高いことが分かり、小型歯車用の仕上げ用加工機を開発してきた。

「競争が激しい自動車分野から他に目を向けると、まだまだチャンスがあることが分かりました。その一方、実は小型用の機械に一番注目してきたのは自動車メーカーでした。ハイブリッドカーや電

壁を取り払うのが最初のステップになります」

インドの取引先では、機械一台を売るのが技術に関する書類をガンボール二箱分提出したこともあった。相手の疑問に対し、徹底的に説明してきた結果だ。

機械が持つ 本質的な良さに気付く

一九九四（平成六）年に代表取締役就任したとき、バブル崩壊の影響で、清和鉄工の業績は低迷し、苦しい日々が続いた。それでも、自社の機械への自信は揺るがなかった。その自信が、海外に飛び出す勇氣にもつながっていったという。

「海外に出ることで、世界のトレンドやこれから動く市場を知ることができただけでなく、製品開発のバランス感覚がつかまりました。いろいろな国の事情が分かった上で機械のコンセプトを決めると、海外でも受け入れられやすいです」

こうした積極的な姿勢は、技術畑の出身ではないから取れるのだと達社長は言う。技術の限界が分からないからこそ、まずは顧客のニーズをつかんでから、どうやって解決できるかを考えていく。「とにかくやってみよう」と工場に持ち帰ることが第一歩となる。

「お客さまが求めているのは、機械が持つ

気自動車のモーター、あるいは自動車の細部でニーズが高まっています。自動車産業の裾野の広さを実感しました」

「地域にずっとお世話になってきたので、何らかの形で恩返ししていきたいと考えています。地元で歯車に関する授業を行ったり、歯車の博物館をつくることも考えていますが、地元企業として誇れる企業であり続けることが一番大事ではないでしょうか」

出雲から世界に飛び出し、製品の可能性を広げていく。清和鉄工の挑戦はこれからも続く。



出雲市斐川町の本社社屋

独自開発のビジネスモデルで 精密板金加工を極める倉敷レーザー

《岡山県倉敷市》

最新鋭のレーザー加工機でステンレスや鉄板などの精密板金加工に取り組み倉敷レーザー株式会社。ITを駆使した独自のシステムを構築し、見積もりから受注、生産、納品までを一元管理しているのが特長だ。圧倒的なスピードと品質の高さで、金属加工の世界に革新をもたらしている。

■多品種変量生産を実現

依頼に応じてレーザー加工機やロボット溶接機などで金属加工を行う倉敷レーザーが、顧客から受け取る図面は毎月一万から一万五千アイテムに上る。それらを即座に見積もり、生産して納める。薄板から厚板まで幅広い金属加工が行える高い技術力を誇り、最高品質の製品を迅速に提供できるのが同社の強みである。

「私たちが取り組んでいるのは、個々のお客さんの注文に基づく、いわば一品料理。それを一個から数万個まで、受注量に合わせて製造しています。図面を持ち込まれたその日のうちに仕上げることもある。他に真似のできないスピードで多品種変量生産を実現し

ているのが、当社の最大の売り」と難波社長は強調する。

それを可能にさせたのが、二〇〇八（平成二十）年に構築した「倉敷レーザービジネスモデル」である。図面を受け取るとスキャンして中国・北京のプログラムセンターにメールで送り、CAD（コンピュータ支援設計）データにする。蓄積された工程・実績・原価・売り上げのデータベースを基に、CADデータから原価や作業時間などを計算し、短時間で依頼主に見積もりを提示する。見積もり段階で生産工程は確定しているため、受注後は直ちに作業指示書や加工データなどを作成して製造し、納品する。ITを駆使した一元管理システムによって、社長や熟練社員の勘と経験と腕に頼つ

ち上げた木工所が出発点となっている。

「魚を入れるトロ箱を買い、野菜を詰める箱に作り替える商売から始めた。その後、機械を導入し、敷居や鴨居、床材、窓枠などさまざまな木材加工品を手掛けました」と難波社長。

十数人の従業員を雇って事業を進めていたが、気付くと木材は金属やプラスチックに変わっており、街中から材木商が姿を消していた。このままでは未来が描けない。金属加工への転身を決意したが、ともに参入しても成功はおぼつかない。そこで目を付けたのが新しい技術であった。

「開発されたばかりのレーザー加工機に懸けてみようと思ったのです。三菱電機製の二号機を入れ、とまどう従業員とともに金属について一から勉強しました。最初はうまく加工できず、二万円で受注した製品を完成させるのに五十万円の材料費がかかりました」と難波社長は苦笑する。

それでも半年経たないうちにフル稼働となり、レーザー加工機を増設。その後も毎年一台のペースで増やし、二交代制で製造した。切るだけでなく、曲げや溶接も行う精密板金加工も開始し、九州にも工場を開設した。

順調に事業を拡大していた倉敷レーザーの一つの転機は、一九九〇年代後

■幅広い分野に製品を供給

倉敷レーザーは、自動車や電機、半導体、建設、医療、食品などさまざまな分野の機械装置の部品や材料を供給し、日本のものづくりを支えている。国内生産拠点の海外移転に伴って受注産業は苦戦を強いられるが、「それを補うには、間口を広げるしかありません。一社依存は危険。当社には総売り上げの5%以上を占める取引先はありません」と難波社長は言い切る。

二〇一一（平成二十三）年一月には本社・工場を、倉敷市松江から同

てきた金属加工業は、データに基づく合理的・効率的なビジネスに進化した。その結果、新入社員でも一定の研修を受ければ、短期間で営業や生産現場の第一線に立てるようになった。「営業のないところに成長はない。ここまでのシステムは、大手企業でも確立していないと思いますよ」と難波社長

は自信をのぞかせる。倉敷レーザーは、ITによる優れた経営を実践している企業として、二〇〇九（平成二十一年）年に「おかやまIT経営力大賞」に輝き、二〇一〇（平成二十二年）年には経済産業省から「IT経営実践認定企業」に認定された。

■木工から金属加工へ転身

倉敷レーザーの設立は一九八三（昭和五十八）年一月だが、創業はさらに遡り、一九六五（昭和四十）年に立



24時間無人運転が可能なレーザー・タレバン

市船穂町に移転した。その披露パーティーを三月十二日に企画し、多数の取引先や関係者を迎えようとしていた前日に東日本大震災が発生した。

「東北の惨状をテレビで見ても、中止すべきではないかと悩みました。しかし準備は整い、遠方から倉敷入りしている招待客もいて中止できなかった」

心を痛めた難波社長は、二〇一二（平成二十四）年八月、福島市に東北事業所と工場を開設した。「東日本をにらんだ事業展開を考えていたので、少しでも被災地の雇用につながり、お役に立てればと進出しました」と話す。

二〇一五（平成二十七）年一月には福岡県宇美町に新工場が完成し、

九州事業所を移転した。難波社長は自慢のビジネスモデルに磨きをかけ、本社、東北、九州、上海の生産拠点でさらなる生産力アップを図っている。



パイプ専用レーザー加工機



パイプを切って作ったコブラを手にする難波社長



溶接サンプル



倉敷市船穂町の本社社屋

「日本一の清流・錦川」の保全で地域に活気を生み、未来へつないでいく白井啓二さん

清流・錦川を守りながら、流域の自然と文化を生かしたさまざまな活動を行い、次世代に継承していく錦川流域ネット交流会。「活性化だけが地域づくりではない。環境を守って流域を一つにまとめることも地域づくり」を念頭に、常に喜びを持って活動に臨んでいる。



profile

白井 啓二(しらいけいじ)

1958年山口県錦町(現岩国市)生まれ。父親の急逝に伴って大学を中退、家業の建設業を継ぎ、2000年より株式会社にしき代表取締役。錦川流域ネット交流会代表世話人、錦川観光協会会長、やまぐち自然共生ネットワーク会長、錦川オオサンショウウオの会長代行など、数々の地域団体のリーダーを務めている。

文:村上 郁子(山口県岩国市在住) 写真撮影:竹重 満憲(山口県岩国市在住)

多彩な活動の原点は川で遊んだ子どものころの記憶

山口県最大の川・錦川は、周南市鹿野町を源流域に、岩国市の錦町、美川町、市街地を経て瀬戸内海へ注ぐ。二級河川ながら延長百十キロメートル、流域面積は九百平方キロメートルに及ぶ大河だ。河口から六キロメートルの地には名橋・錦帯橋があり、二〇一二年平成二十四)年十二月の岩国錦帯橋空港の開港以来、地元ではあらためて観光振興に期待が寄せられている。

この錦川の流域・錦町に生まれ育ち、「日本一きれいな錦川を守っていく」と、さまざまな活動のリーダーを務めている



カヌーの達人と川下り 写真提供:錦川流域ネット交流会

るのが錦川流域ネット交流会代表世話人の白井啓二さんだ。

白井さんは錦川のそばで過ごした少年時代を振り返り、「物心ついたころから川で遊んでばかりいました。特に夏休み中は、朝十時を過ぎると小刀や水中メガネを手に仲間と繰り出し、魚を捕まえたり、泳いだり…日がな一日、川で過ごしたものです」と、懐かしげに語る。畔道ではマムシに用心し、家の畑から穫ってきたスイカを河原の岩清水で冷やしたり、捕まえた魚をさばって焼いたり…。

「川の深い所や流れの速い場所は上級生に教わって、命令どおりに動いているうちに泳げるようになる。川の怖さも体で学びましたね」

一冊の本との出会いが川の活動のきっかけに

地元の高校を卒業後、大阪の大学に進学した白井さんは、父親の急逝に伴って帰郷し、二十一歳で家業を継ぐため白井建設に入社。錦町商工会青年部に所属して地域のボランティア活動にも精を出し、青年部長となった三十五歳のころ、一冊の本と出会った。宮崎県綾町の旧町長・郷田實さんの著書『結いの心』だ。一晩で読み上げて「豊かな自然を生かし、交流が楽

しめるまちづくり」という趣旨に感動した白井さんは、すぐに綾町を訪ね、膝を突き合わせて郷田さんの話を聞いた。郷田さんご自慢の綾川も視察したが「錦川の方がもっときれいです」と進言し、半年後に郷田さんを岩国に迎えて錦川を案内した。「郷田先生は澄み切った錦川を見て『確かに日本一の川。でも、放っておくとすぐに汚くなるよ。君たちが汗をかき、楽しみながら守っていきなさい』とおっしゃったのです」

川掃除からスタートし、流域ネット交流会発足

当時八十三歳だった郷田氏はその一カ月後に他界。贈られた言葉を遺言のように感じた白井さんは、すぐに商工会青年部に呼び掛け、錦川清流委員会を立ち上げて川掃除を始めた。約六キロメートルの地元区間を青年部と町民有志約七十人で掃除したところ、大型ダンブ三台分のゴミが集まった。以後、定期的に掃除を行ってゴミの量は減っていったが、完全になくなることはない。ゴミは大水が出る度に上流から流れてくるからだ。限界を感じていた矢先、流域各地で清掃を行っていた団体が集まって一斉清掃を行うプランが行政から提案された。白井さんも実行

委員となって尽力し、二〇〇〇(平成十二年)七月に初めて開催した錦川流域一斉清掃には約二千人が参加した。その後、二〇〇二(平成十四)年に錦川流域の自然・文化の保全活動団体やその趣旨に賛同する企業、団体など三十二団体が集まって錦川流域ネット交流会が発足。毎年七月中旬の日曜日に錦川流域一斉清掃を開催し、現在では約四千人の市民が参加するようになった。会の代表世話人に就任した白井さんは、「自然は永久に錦川」を合言葉に、連携を図りながら流域の自然を守り、楽しみ、伝えていく活動を続けています。会員は現在四十六団体・三万二千人になりました」と、く語る。

源流の碑の建立により各地域に活気が生まれる

交流会の活動の一つが「錦川源流の碑」の建立だ。錦帯橋は過去二回、洪水や台風で流失し、その度に錦川流域の木を切り出して再建されてきた。二〇〇一(平成十三)年からは老朽化に対応して半世紀ぶりの架け替えが行われたが、錦川流域ネット交流会では、その廃材を感謝の気持ちで込めて源流の地へ運び、「源流の碑」を建て

尾道



海と山に囲まれ、古くから風光明媚な港町として栄えた広島県尾道市。町並みの歴史をひもとくと、中世から近代までの時代が混在しながら、尾道特有の景観をつくり出していることが分かる。

北前船も寄港した 商都として発展

広島県南東部、瀬戸内海に面した尾道は中世以降、東西約一キロの海岸沿いの市街地を中心に形成された港町

である。尾道港が一六九(嘉応元年)に備後大田庄の年貢積み出しの公認港となつて以来、中世の尾道は海上交易の要衝として発展した。室町時代に今の市街地に近い町並みが形成され始め、一六一九(元和五)年に広島藩主となった浅野氏は、市街地の久保町・十四日町・土堂町の地域を尾道町と定めている。江戸時代初期には、江戸時代初期には、

藩主となった浅野氏は、市街地の久保町・十四日町・土堂町の地域を尾道町と定めている。江戸時代初期には、江戸時代初期には、海岸沿いの西国街道、それと交差して石見銀山から銀を運ぶ銀山街道

(出雲街道)が整備された。さらに、十七世紀に尾道港が西廻り航路・北前船の寄港地になったことから、尾道は陸海の物流の集積地となり、商都として繁栄を極めたのである。

商人たちが主導したまちづくり

まちの発展に伴い、江戸時代以降どのように変わったのか。それを江戸時代の『尾道絵屏風』と昭和初期の『尾道市観光図』を比較してたどってみる。

商都の発展とともに変化したのは海岸線である。江戸時代当初は今の本通り(①西国街道)がほぼ海岸線で、海岸に面して②尾道町奉行所があり、街道と海の双方を監視していた。やがて江戸時代から明治、大正にかけて海が埋め立てられ、市街地が南に拡大していく。とくに北前船の寄港以降、埋め立てと整備が加速し、一七四一(寛保元)年に尾道町奉行の平山角左衛門が③住吉浜を埋め立てて海岸の基礎を築き、その他の海岸も豪商たちの手で次々と埋め立てられていった。④久保町の新聞は、尾道の豪商橋本家が埋め立て、明治以降映画館や芝居小屋などが並び、今は歓楽街として賑わう。やはり埋立地の米場町界隈は、

明治、大正時代には第六十六国立銀行や尾道銀行(いずれも現広島銀行)、住友銀行尾道支店など多くの銀行が集積し、⑤銀行浜と呼ばれた。旧尾道銀行を改装したのが、「おのみち歴史博物館」である。

こうした尾道の発展を担った豪商の一つである橋本家の別荘が、⑥爽籟軒である。江戸時代の別荘で、趣向を凝らした庭園や茶室が残されており、茶室の「明喜庵」は、京都山崎にある国宝妙喜庵待庵の写しとして貴重な文化財である。

一方、山側は海岸沿いとは異なる歴史をたどった。斜面の坂道と家々を結ぶ細い路地が織り成す「坂道の町」という尾道特有の景観で名高いが、『尾道絵屏風』には、坂道も民家も見当たらない。その理由は、港町より古い歴史をもつ千光寺、浄土寺、西国寺の三山を中心に、商人たちが建立した八十の神社仏閣が林立する聖域だったからである。山側は神社仏閣の聖域であり、海側の生活空間とは峻別されていたのである。

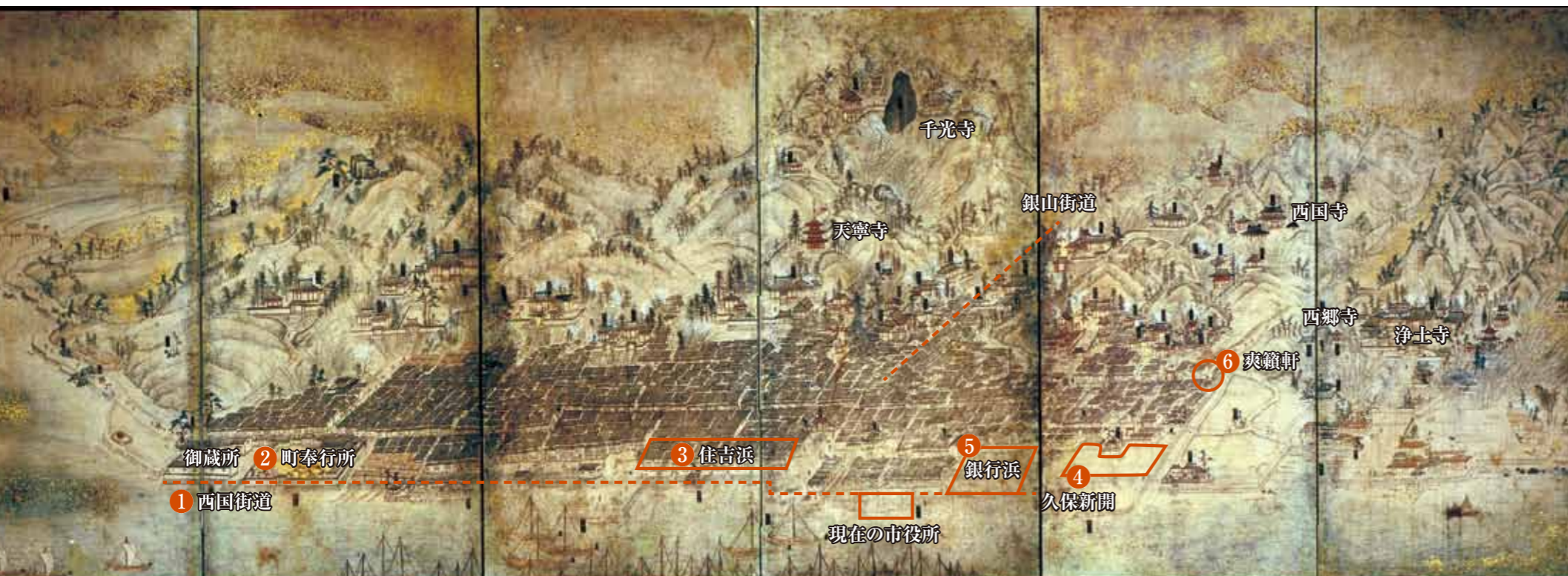
その聖域が、『尾道市観光図』のように民家も混在した坂道の町へと変貌した契機は、一八九一(明治二十四)年の山陽鉄道(現JR山陽本線)の

開通である。本通りの北側を鉄道が走り、立ち退いた人々が山の斜面地に移転していった。やがて、海を見下ろす眺望が好まれ、豪商や文人墨客などが和洋折衷の別荘を次々と築くようになる。その結果、多くの民家が

立ち並び、山麓から家に至るタテの坂道、家々や坂道をつなぐヨコの道が張り巡らされ、迷宮の路地が生み出されていったのである。ちなみに、⑦「天春の石垣」は、大正時代に豪商・天野春吉が築いた別荘の石垣だ。城の石垣に匹敵する壮大さで、今では観光名所となっている。変わる町並みの一方で、江戸時代の幹線・西国街道は、本通りと同じ道筋で、二カ所の鉤型も変わっていない。当時の街道沿いには、間口が狭く奥行

きが長い商家が密集し、表に商店、奥に蔵や庭園、茶室などがあつたというが、今も商店街である。街道から山側、海側へは小路を通じ、今でも薬師堂、浮御堂などの小路が、尾道らしい景観を呈す。また、銀山街道沿いの⑧長江付近には、特産である豊表の間屋の家屋が残され、江戸時代の面影を今に伝えている。尾道では、街道や小路の道も景観や歴史と深く関わっており、道散策も観光の一つである。

(文・川西由香理)



【紙本着色尾道絵屏風】1774(安永3)年 尾道市重要文化財 浄土寺蔵



【躍進の商港 尾道市観光図】前田虹映 1949(昭和24)年ごろ 尾道遺跡発掘調査研究所蔵



爽籟軒茶室「明喜庵」



おのみち歴史博物館

尾道水道の風景

山口線

山口市・
島根県津和野町・益田市

周防から石見まで異なる文化圏をまたがる山口線。二〇一三(平成二
十五)年夏の集中豪雨で甚大な被害を受けたが、一年に及ぶ復旧作業
を経て、SL「やまぐち」号の元気な汽笛とともに復活した。



C57-1がけん引するSL「やまぐち」号

集中豪雨被害から 一年かけて全線復旧

JR山口線は、山口市の新山口駅と島根県益田市の益田駅を結ぶ全長九十三・九キロメートルの路線である。通勤・通学・通院など生活交通としての役割を担っているが、二〇一三(平成二十五)年七月二十八日、山口と島根の県境周辺を襲った集中豪雨の被害によって、宮野駅―益田駅間の一部区間が運休した。

特に地福駅―津和野駅間では、橋梁三カ所流失、トンネル内土石流流入、築堤崩壊など甚大な被害を受けた。その後、復旧作業が急がれたものの、宮野駅―地福駅間の運転再開は同年八月五日、津和野駅―益田駅間は同年十一月十六日で、最も被害が大きかった地福駅―津和野駅の復旧には一年以上を要した。

二〇一四(平成二十六)年八月二十三日、山口線の地福駅―津和野駅間での運転が再開された。当日、新山口駅、津和野駅、益田駅では、全線運転再開を祝ってさまざまな記念式典やイベントが開催された。式典では二〇一五(平成二十七)年のNHK大河ドラマ『花燃ゆ』の舞台となることにちなみ、ドラマ出演の俳優も参加し話題となった。

山陽鉄道と城下町山口をつなぐ 軽便鉄道として誕生

一九一〇(明治四十三)年、軽便区間として小郡駅(現新山口駅)―山口駅間が開通し、一九一三(大正二)年に、国鉄によって同区間が改築・改軌された。一九一七(大正六)年には、山口駅―篠目駅までを延伸。この延伸は、全長千八百九十七メートルの田代トンネルなど多くのトンネルを建設しなければならぬ難工事だった。さらに、一九二二(大正十一)年には津和野駅、一九二二(大正十二)年には石見益田駅(現益田駅)まで延伸し、全通を果たした。

貴婦人C57がけん引する SL「やまぐち」号

山口線と聞いて思い浮かべるのが、やはりSL「やまぐち」号である。SL

列車の復活は今では珍しくないが、一九七九(昭和五十四)年、SL「やまぐち」号が登場したときは大きく報道された。当時、SLが走っていたのは私鉄の大井川鐵道だけだったため、SL「やまぐち」号は国鉄が復活させたSL第一号であった。けん引するのは、「貴婦人」の愛称を持つC57形1号機。ボイラーが細く、ボックス型の大動輪のついた姿は、優美な機関車としてファン垂涎のSLだった。

山口線に決まったのは、津和野の機関庫に転車台が残っていたことが大きいといわれている。

現在でもSL「やまぐち」号は新山口駅から津和野駅まで、夏を中心に年間約九十日運行しており、平均年間約六万人が乗車している。けん引される客車12系五両は一九八八(昭和六十三)年からレトロ調に改装され、明治風、大正風、昭和風、欧風、展望車風と車両ごとに様式が異なる。

このような国鉄のSL復活運行は、当時の高木文雄国鉄総裁の意向で決まったが、多くの路線が誘致した中で

新山口駅から宮野駅あたりまでの平野部は穏やかに進むが、次の仁保駅から篠目駅にかけては木戸峠越えの難所



作図：小学館クリエイティブ

異なる文化圏を旅する

SLだけでなく、周防から石見まで異なる文化圏を旅することができる点



瑠璃光寺の五重塔



常栄寺雪舟庭



殿町通りの掘割
写真提供：島根県観光連盟



サビエル記念聖堂



高津川のアユ釣り 写真提供：島根県観光連盟

そのほか沿線には、本州で一番光害の少ない夜空を楽しめる日原天文台や湯田温泉、もみじの名所・長門峡、しだれ桜の徳佐八幡宮など見どころは多い。それぞれに趣があり、その多様性が山口線の魅力といえそう。

(文・藤沢享乃)

も山口線の醍醐味といえよう。

周防文化圏が花開いた山口市は、西国一の守護大名・大内氏の城下町である。常栄寺の雪舟庭や瑠璃光寺の五重塔のほか、サビエル記念聖堂があり、南蛮文化の薫りが残る。

石見文化圏の益田市は、赤茶色の石州瓦の家並み特徴だ。市内を流れる高津川は全国屈指の清流で、日原駅―石見横田駅間の車窓からはアユ釣りの様子を眺めることができる。また、森鷗外や哲学者の西園庵を輩出した津和野町では、藩校養老館跡やコイが泳ぐ掘割、白壁の殿町通りなど、昔ながらの町並みが堪能できる。

赤絲威鎧・大袖付(伝源義経奉納)——《愛媛県今治市》

芸予諸島を中心にある大三島の大山祇神社の祭神「大山積神」は地神・海神で、古くから陸や海の民の信仰を集めてきた。

信仰は時代を超えて連綿と続き、大山祇神社は、源氏、北条氏、足利氏など歴史に名を残す武将たちにとって、尊崇の対象となる。その証しに、平安中期の現存最古の鎧にはじまり、鎌倉から戦国時代までの武具類、あるいは当世具足など、各時代の一級の武具が所蔵されている。



大山祇神社蔵

赤絲威鎧は、源義経が壇の浦の

合戦で勝利をおさめ、部下の佐藤忠信に代参奉納させた鎧と伝えられる。大袖が付き、弓を射るときに開く脇と胸部を防御する楯状の梅檀板せんだんのいたと鳩尾板きゅうびのいたを備え、胴正面に弦走韋つるはしりのかわを張るなど、大鎧のスタイルを持ちながら、大腿部を保護する草摺くさすりなどは胴丸仕立てどうまるじだてにされており、胴丸と鎧の特色を兼ね備えた特殊な型である。

小舟など狭い場所でも戦えるように、草摺が七間仕立てはつせうで、「八艘飛びの鎧」ともいわれる。